

サイレント映画『リチャード三世』(1911年) における映画のコミュニケーション

桑 子 順 子

はじめに

1996年に『リチャード三世』のサイレント映画(1912年作)⁽¹⁾が完全な形で発見されたときは大きなニュースになった。この映画はシェイクスピア作品を本格的に映像化しようとした世界で最初の長編だからである。シェイクスピアの作品はこれ以前にも映画の創世期から数多く作られている。映画という新機軸のメディアが古典文学によって芸術という権威を求めたからともいわれる。が、興行収益を上げるという目的が当初からある映画にとってシェイクスピアの作品は格好の素材でもある。時間の隔たりによって古典芸術のラベルを獲得してはいるが、シェイクスピアの劇作は元来興行が目的であったからだ。『リチャード三世』の映画はこの作品以前にも1908年と1911年のものが知られているが、現在見ることができるのは1911年の作品だけである。サイレントの初期でシェイクスピアの作品を扱った映画は『ハムレット』について『リチャード三世』が多い。⁽²⁾『リチャード三世』の主人公リチャードはその特徴的な容姿と次々に人を欺く悪党ぶりが映像として表現しやすいと考えられるのかもしれない。

しかしながら『リチャード三世』は膨大な量の独白がハムレットに次ぐ長さで存在している。幕開きは、リチャードが一人登場して40行ほどの独白を語る。そして観客は舞台上でリチャードの述べたとおりにストーリーが進むようすを目の当たりにする。次の1幕2場のアンに対するリチャードの求愛の場面では、270行に及ぶ二人の舌戦が展開する。この二つの場面はリチャードを魅力的な悪党として観客にひきつけるための強烈なきっかけでもある。このようなせりふをそのままサイレント特有の挿入字幕で出すことは不可能であり、せりふということばのコミュニケーションをなんとか映像のコミュニケーションに変えなければならないのである。サイレントの映画はトーキーとは違って、せりふのほんの一部しか挿入字幕に取り入れることはできない。この映画が発見されたときに Kenneth S. Rothwell は次のような説明を加えている。

The recently discovered print is framed with brief glimpses of professional-looking Warde acknowledging the plaudits of his audience. It is ever possible that Warde functioned like the “benshi” in Japanese silent movies, whose purpose was to explain to spectators what they were seeing even as they were seeing it.⁽⁴⁾

上の引用からも分かるように、日本の「弁士」は西洋においては存在しなかった。従って例外的な映画を除いてすべて口頭による場面の説明はなく、映像と挿入字幕において映画は進行した。ほどなくして音楽の楽譜がつけられて配給されるようになったが、同時演奏は監督の意図に反して即興で勝手に変えられたり、画面と無関係に演奏されることさえあったりしたようである。

サイレント映画でない場合はせりふと映像の折り合いをつけながらシェイクスピアの作品を映像化させていくわけであるが、サイレントではコミュニケーションの書き換えを迫られる。したがってサイレント映画でこの劇がどのように映像化されているかを探ることはコミュニケーションのあり方の特徴を考察することになるだろう。さらに1912年の映画では、主人公を演じた役者が弁士の役割をはたしていたとすれば、どうしても映像にできない場面があると考えられており、それが画面に映し出されているのかもしれないし、あるいは映像と言葉との伝えられる内容の限界についての認識が影像に記録されている可能性もある。

シェイクスピアの劇作品は聴く作品であったとされている。つまり『リチャード三世』に限らず、劇はせりふが中心のことばによるコミュニケーションを主体とした演劇として成り立っている。演劇である以上、劇は視覚的要素とともに展開していくわけだが、ことばによって観客は想像力をかきたられて、想像によって舞台に観客自身が色をつけてスケールを広げていくことが目指されていく。このようなシェイクスピアの演劇のことばのコミュニケーションと、その作品を映画化した映画の映像のコミュニケーションはいかなる差異を示すのであろうか。サイレントということばをいわば奪われた映像の世界で、このコミュニケーションの変換はどのように行われたのであろうか。これらの映画をとおして、サイレントであるがゆえに示唆されうる、映像だけに可能なコミュニケーションはあるのかという点を中心に、1911年のサイレント映画について詳細な分析を試みたいと考える。

1. 1911年の『リチャード三世』⁽⁵⁾

シェイクスピアのサイレント時代の作品を網羅的に考察した Robert Hamilton Ball⁽⁶⁾にしたがうとこの作品は、モノクロ、23分、Co-operative Cinematograph Company 製作、1911年、1385フィート。Stratford-on-Avon の Shakespeare Memorial Theatre での F. R. Benson 劇団の上演をもとに、この劇団の上演で一連の映画が作成されたうちの最後の作品である。あわせて作られた作品とは *Julius Caesar*, *Macbeth*, *The Taming of the Shrew* の三作である (Ball, 84-8)。現在これらは消失しており見ることはできないが、この映画の記録映像としての価値について考察した Russell Jackson⁽⁷⁾によると撮影の様様を写真に撮ったと思われる絵葉書がいくつか残っているらしい。どの映画でも共通の劇場用の書割りを使用し、カメラ位置もほぼ同じであると推測できるようだが、当時の新聞等の映画評は、一様に劇団側が映画作成に前に作ったハンド・アウトをもとにして書かれているらしい。

Ball と Jackson はこの映画が13のシーンに分かれているのでそれについて Ball は挿入字幕とそれが原作のどの部分に相当するかを書き出し、Jackson は主に舞台の場面構成についてその特徴を書き出している。映画そのものが明確に挿入字幕によって場に分かれているので各シーンにまず二人の説明を Ball, Jackson の順で引用し、それが実際にどのような作品展開になっているのか述べたい。

Ball は各シーンの挿入字幕を書き出しておりそのあと [] 内に場面の説明を行っている挿入字幕が、原作からの引用である場合は “ ” で囲んである。このせりふのあとの原作の場所を表す数字はもちろん字幕にはでないものであり、筆者が記入した。Jackson は場面の書割りを中心とした舞台設営の説明を行っている。したがって記号の表記はそのまま順に引用していくが、字幕で出る部分は可能な限りわかりやすいように改行して引用し、あとの番号につづく引用は、Jackson の場面概説である。

Scene 1.

The Battle of Tewkesbury. Henry VI defeated and crown passed to Edward IV.

[This is a kind of amalgamation and simplification of material from *Henry VI*, Part III, V, 5 and 7, the defeat of Queen Margaret and the Lancastrian forces, and Edward's resumption of the throne.]

1. *Battle of Tewkesbury*. Backcloth of distant landscape, framed (on cloth) by tree's to the viewer's left and right.

映画は Ball の説明にあるように *Henry VI*, part 3 の 5 幕の 5 場と 7 場から部分的に取った場面で始まる。Jackson によると1700年の Colley Cibber の翻案にしたがった上演になったものではあるが、ヘンリー 6 世の殺害を頂点とする幕開きの部分は Cibber の本文は使わずシェイクスピアの本文を使用するようになっていたらしい。さらに Benson は1886年～1910年までの9回の上演中7回までヘンリー 6 世を幕開きに登場させた記録が残っているが、いずれの上演もチュークスベリーの戦いの場면을幕開きにはおいておらず、シーン2のロンドン塔の場面から始まっていたと記録されている (Jackson 117-8)。

この場面は劇場用の既存の書割りの前で、戦い直後の映像が展開している。舞台上に大勢が立ちエドワードだけは、台の上に立っているが、そこへ本物の馬に乗った騎士が登場し、その騎士がヘンリー 6 世、マーガレット、王子 (エドワード) をつれてくる。ヘンリーは王冠をエドワードへ渡し、王冠を受けたエドワードは妃によって戴冠する。この部分は *Henry VI*, part 3 の 5 幕 5 場にはない場面であり、映像として王冠が譲渡されたことを伝えている。ヘンリーは連れ去られ、マーガレットの愁嘆も退けられたとき、王子エドワードが5幕5場で描かれている通りに決然とヨーク家の面々を謀反人として糾弾するようなそぶりが見え、それを阻止しようとしたリチャードを王子が背中からこづき倒そうとする。が、ジョージが即座にわき

から王子を倒し、体勢を整えたりチャードはすばやい動きで王子を刺し倒れた王子の上に勝ち誇る。そしてエドワード王をたたえるポーズで握手し、クラレンスとも手を握り、笑みをかわして場面が終わる。しかしはじめの挿入字幕は、戦いの名前と王冠が誰から誰に譲渡されるとしか述べてないわけだから、作品を知らなければこの部分はほとんどすべての人間関係がわからないまま、ただ、王位がおそらく戦闘の結果、ヘンリーからエドワードへと変化したことがわかるだけである。

この場面で最も動き回るのは、リチャードであることは明らかである。ただし字幕からはリチャードであるかどうかはまだわからない。*Henry VI, part 3*の5幕5場においてはエドワード王子の殺害は、王妃マーガレットの目前で、ヨーク家のエドワード、リチャード、ジョージが順に次々と王子を刺して行われる。自分も殺してくれというマーガレットをリチャードは刺し殺そうとする。が、それはエドワードがとどまらせ、リチャードはヘンリー殺害にロンドン塔へと向かうわけである。しかしこの映像では、三人で続けて王子を刺すのではなく、リチャードの立ち回りによってエドワード王子が死に、エドワード、ジョージはあまり動きもない。王冠を受け、ひときわ高い台上にいるエドワードより、リチャードが完全に目立っている。あるいはリチャードと思われる人物、作品を知らなければ、エドワード王より目立った人物がいるということだけはわかる。映像としては、騎士が舞台上に本物の馬に乗って登場し、ヘンリー一王と妻子つまりは王冠と王位を体現するものを連れてくるのが興味深い。

Scene 2.

Murder of King Henry VI in the Tower of London by Richard,

Duke of Gloucester, afterwards Richard the Third. [*Henry VI, Part III, V, 6.*]

“I’ll throw the body in another room,

And triumph, Henry, in the day of doom.” (*Henry VI, Part 3, 5.6.92-3.*)

2. Murder of *Henry VI*. Patterned backing (stone walls, with tapestry), with practicable door set close against it at an angle on right.

*Henry VI, part 3*の5幕6場と同じ設定で、読書中であったヘンリーを、リチャードが塔の管理人を退けてから襲う。ヘンリーは囚われているわけで、無防備な老人に見える。リチャードはこの無抵抗のヘンリーを一方向的に刺すだけでなく、机の上に倒れたところを机上に上り、机に立って再び刺してみせる。さらにヘンリーの衣服で剣についた血をぬぐい、その死を確認して机上で死体に片足をかけ、「やった」というポーズをとる。リチャードは字幕どおりに死体を持ち出すが、かかとを持って背中に逆さに背負うかたちで退場する。

『ヘンリー六世・第三部』の5幕6場では、ヘンリーがリチャードを言葉で激しく非難しており、リチャード自身もその内面の闇を垣間見せるようなせりふもあるのだが、映画では二人が何を話しているか内容もわからないのでこれについては示すことはできない。映像化されてい

るリチャードの行動は、“See how my sword weeps for the poor King’s death. (5, 6, 63.)”にはっきりあらわれている血なまぐさい殺人について語るリチャードのせりふを映像にしたものであろう。かくしてリチャードはより残酷なイメージを形成する。挿入される字幕もリチャードが死体を引きずっていくときの最後のせりふであり、強烈な悪党としての人物像ができ上がる。

Scene 3.

King Edward IV orders arrest of Clarence, at Gloucester’s instigation.

[*Richard III*, I, 1.]

“Go tread the path that you shalt ne’er return,

Simple, plain Clarence ! I do love thee so,

That I will shortly send thy soul to heaven.” (*Richard III*, 1, 1, 117-120.)

3. *Richard sets the King against Clarence.* Backdrop of street scene. Practicable steps and rostrum (leading off) placed upstage extreme right, apparently close to cloth. Market cross with square ‘stone’ base upstage left.

この場面の特徴は、上演の際にはなく、映画のために作られたものと Jackson が指摘している。フードをかぶった修道僧にリチャードが何かを頼む様子のすぐあと、その僧が王に手紙を渡す部分である (Jackson, 116)。舞台右手から大勢のとりまきと一緒に、王妃、王子とともにエドワード王が登場するが、王に手渡された手紙にはクラレンスを陥れるための予言がかかかれていると思われ、読むとすぐに王はクラレンスを捕らえさせて死刑の命令書に署名をしてリチャードに渡して退場する。リチャードが舞台に残るところへ二人の殺し屋が現れ、リチャードがこの命令書と金を与えて殺しを依頼する様子が描かれる。

これらのストーリーの展開が、映像とはじめの挿入字幕だけでわかるのかどうかはかなり疑問である。つまりいまだクラレンスがどの人物であるかという説明はないので、リチャードがフードをかぶった怪しい人物と何かやっていて、それが王の心情に対して重要な意味を持つことが書いてあり、その後の展開からクラレンスらしい人物の逮捕が描かれるということが分かるだけである。ただ、リチャードが常に嬉々として殺し殺害を依頼しているというイメージは強い。この場面の冒頭では、路上の様子が映り画面の一番手前左手で子供たちが輪になって回りながら遊んでいるが、この子供たちに、登場したりチャードは何か (おそらく小銭とか甘いもの) を投げ与えている。このどことなくうれしそうでさりげなく寛大な様子は、リチャードが殺し屋たちに見せる様子と類似している。

Scene 4.

Richard woos Lady Anne over King Henry’s corpse. [*Richard III*, I, 2.]

“Was ever woman in this humour woo’d ?

Was ever woman in this humour won?

I’ll have her but I will not keep her long.” (*Richard III*, 1. 2. 232-4.)

4. Funeral procession and wooing. As 3.

この場面はいわゆるアンの求愛の場面として有名な場面である。すでに述べたようにこの部分はリチャードとアンの舌戦が展開するわけで、激しい言い争いは結局リチャードの勝利におわるが、言語によるコミュニケーションを映像によるコミュニケーションとして書き換えなければ映画にならない。さらにはリチャードという冷酷な悪党の、女性に対する側面を見せ、もう一つの魅力を描き出す部分でもあるのだ。したがってこの場面については特に詳細な分析を試みたい。

映像として際立っているのは、舞台上演の際に二度（アンとエリザベスに対して）行っていたという記録が残っている、リチャードの催眠術をかけるようなしぐさである。映画版では、同じ所作の繰り返しはないが、催眠術をかけるようなしぐさは、言葉の魔術にかけられるアンの様子を言葉なしで映像化するのには適切に思える。しかしながら Russell Jackson の推測によれば、特にこの催眠術をかけるようなしぐさの部分は舞台上演の再現であり上演とほぼ同じテンポで演技されたものらしい (Jackson, 119)。

詳細な分析

舞台にまず左手からヘンリー六世の棺とともにアンが、つき従う人々とともに登場するが、棺を下ろして嘆こうとする瞬間に右手からリチャードが現れる。映画では挿入字幕が先行しているので、棺がヘンリー六世のものであり (Richard woos Lady Anne over King Henry’s corpse), アンがリチャードに応じることが予想され (Was ever woman in this humour woo’d? / Was ever woman in this humour won?) リチャードがアンの愛を得るために求愛しているのではないことも (I’ll have her but I will not keep her long) 知らされている。

画面ではリチャードとアンが、左右に互いに行き来するかたちで描かれている。さらに原作どおりに街中での場面構成となっており、二人の背後にはアンの従者とおそらく町の人からなる二十人ほどの人々が見守るかたちになっている。この人々のほぼ同時に変化する表情、顔の背け方などによって、アン自身の身振りによるリチャードに対する反応や彼女の心情の表現が補強されることになる。向かって画面の左手から棺とともに入ってきたアンは当初は右へ右へと動こうとしている。しかしアンが画面の最も右によったとき、リチャードは彼女の指に自分の指輪をはめることに成功する。結局彼女はそれ以上右へ進むことはできなくなり、登場した左側へと退場する。かくして棺だけがリチャードとともに右側へ退場するわけである。カメラがまったく動かない状態で撮影されているこの映画でアンの心理の変化は、最も端的には舞台における直線的動きの方向であらわされることになる。

このような状況は舞台上演の当初から綿密に計算されたものかどうかは良く分からないが、

結果的に映像として残されたことによって、アンの画面上での動きが直接彼女の心理変化を伝えることになっている。アンのしぐさはリチャード同様に時代遅れで大げさな動きとなっているが、まずはじめはリチャードに対して憎悪を表現して、画面の右から左へと自分に近づいてくるリチャードから逃れるように右端へと移動する。アンはたたみかけるように話すりチャードに背を向けているが、嘆きながら自分の顔を覆っているアンの両手をリチャードが払おうとするので、両手の爪で美貌を引き剥がしたいぐらいだというセリフが推測できる。そしてここで原作150行前後のリチャードにつばを吐きかける部分に達すると思われるが、つばを吐きかけるようなしぐさはなく、アンは自分に近づいたリチャードのほほ顔の辺りを片手でさっと軽く打ち払うようにして、また左手端へと逃れる。そこでリチャードが剣を抜いて片膝をつき胸を開く場面になる。アンはリチャードが腰につけていたかなり長い剣を二度にわたりのどもとに突きつけるが、二度目はかなり長い間突きつけたまま、結局剣を落としゆっくりとまたリチャードから離れようと右へ移動する。周囲の人々は剣が突きつけられるのに合わせて全員同時に固唾を呑むというしぐさで静止し、落とされた剣にも反応して動揺するように動く。リチャードはこれに勢いを得て、画面右端で自分に背を向けて立っているアンの背後から近づき、ここで催眠術のような手つきをすることになる。アンは片手を後ろに伸ばしているが、その手に対してまるで術をかけるように自分の手をかざし、リチャードが手を上げると、まるで催眠術のようにアンの手が上へと上がっていき、しかもリチャードが自分の手を元にもどした後も、アンの手は高く差し上げられた状態である。周りで見ている人々もまるで術に驚愕したかのような表情でほとんど動かないが、リチャードが自分の指輪をはずしてあやつるような手つきでアンの指にはめて、彼女が振り返ると周囲の人々も驚きに体を動かし始めている。かくして彼女はほとんど術にかかったままのように不自然な動きで右から左へとまたもどり、リチャードが後ろから声をかけると、これまでとは異なる様子でリチャードにこたえて左手へ退場する。リチャードが棺を担ぐ従者とともに右手へ退場しようとするところで映像は切れる。

もちろん上の映像に対する読みは原作を知っているから可能なものであって、作品を知らなければ、①アンと棺の中のヘンリーとの関係がわからない、②リチャードがアンにどのようなことばをかけるかわからないし大体求愛しているかどうか、映像ではわからない、③ヘンリーを殺したのがリチャードであることをアンが知っていると思わせることは、シーン2に続く場面なので可能ではあっても、①のように舅と嫁という人間関係が明確でないので、アンの拒絶の意味もわかりにくい、④原作ではリチャードが自分の夫を殺したことをアンが知っており、その激しい憎悪が明瞭であるが、映画ではまったくわからない、⑤結局映像では何がアンの気持を変えさせたのかという肝腎の部分が抜け落ちてしまう。という5つ目の問題が少なく見積もっても生じている。

かくして舞台上演の記録や劇場の様子を伝える記録的価値は十分あるものの、映画としての価値はあまり認められないとされているこの映画において、アンの求愛における場面は、問題点だけが噴出しているように見受けられる。しかしながらこの求愛の場面には、せりふの部分

を除くと、視覚的な要素も大きいということが、わずか2分ほどの長さではあるがその映像によって提示されてもいる。

すなわちアンへの求愛の場面は、せりふによるコミュニケーションを無理やり削除して考えると、ほぼ三つの要素で成り立つことが示されている。劇中では二人は激しい言葉の応酬をくりひろげるはずが、映像だけが示されたこの短い場面から言葉以外の要素が明確になる。まず棺はアンのリチャードへの憎悪を視覚化するものであり、棺によりその首をうなだれて登場するアンが、最終的には棺からアンが引き離される映像によってリチャードの勝利がはっきり視覚化されるのである。この映画では棺がやや手前に傾けた形で画面中央に常に映っている。ローレンス・オリビエが棺の中身をアンの子にかえ、リチャード・ロンクレインの映画では棺ではなくアンの子の死体にかえられていることでもわかるが、棺にあたるものがアンの子の変化を示す視覚的要素の一つでもある。

もう一つはアンに対して自分の命を投げ出すべく自らの胸元に剣を突きつけさせる映像である。相手に剣を突きつけるという行為によってアンは自分の悲嘆や憎悪についてよりも、リチャードの本心について関心を移さざるをえなくなってしまう。リチャードが言葉で表現することすべては虚偽であると考えていたはずのアンは、アン自身が殺したいほど憎んでいる相手を殺すことができないという事実と自分の前に実際に身を投げ出そうとしている相手の行動によって、自分が関心を寄せるべき対象をみごとにすりかえられてしまうのである。この部分は言葉以上に剣を突きつけるという行為の視覚化が重要なのであって、アンがリチャードを見る視点がこの行為を境に変化するのには明らかなのである。

最後に指輪という劇場的な小道具である。指輪という小さい道具がいかにかの心の変化を象徴するかが映像化することによって十二分に示されている。つまり催眠術をかけるようなしぐさも指輪という小道具がなければほとんど無意味であり、この部分をどのように映像化するかによって、映画におけるアンとリチャードの関係が明確になると思われるのである。

むろんリチャードの巧みなセリフがないことによって、アンの子の変化が唐突で納得しがたいものにもなりうる。しかしこの映画のこの場面ではアンの子の激しい嘆きのしぐさが、場面の進行にしたがって微妙に変化し、剣を落とした転換点の直後に示される催眠術の身振りとその影響で身動きできないようなしぐさによって、アンの子の心情の変化が自然なものにも思われてくる。催眠術にかけられたようにしてまるで知らない間に指輪をはめられてしまったかのように、本人もはっきりとは状況がつかめないまま、ほとんど夢遊病状態の様相で退場をしているからであろう。

結果的に映画ではこの場面が大変に単純化されるわけで、アンの子の悲嘆と憎悪の象徴の棺、アンをそこから引き離すための求愛のことばがこのサイレントでは省かれているので、アンがリチャード自身と向き合わされるために抜かれる剣、アンがリチャードを受け入れることを明示する指輪という三つの視覚的要素に集約されてしまう。リチャードがはじめから勝つつもりだったとはいえ、せりふによれば、リチャードの予想以上の成果だったわけであるし、アンもは

じめの憎悪の激しさはそのまま呪詛のことばとなっていたのだから、気持の変化は単純には表現できないはずのものである。この映画では、映像に書き換えるというより書き換えることを放棄していると考えべきところも多い。逆に舞台よりも映像にしたことで付随的にでてくる要素として興味深いのは、リチャードが異性に対するセクシャル・アピールを帯びることである。映画の場面の切れ目でリチャードが退場していくアンに投げキッスを送る部分はまさにそれを象徴している。

Scene 5.

Murder of the Duke of Clarence in The Tower. [*Richard III*, I, 4.]

“A bloody deed and desperately dispatched !

How fain, like Pilate, would I wash my hands

Of this most grievous guilty murder done!” (*Richard III*, 1, 4, 261-3.)

5. *Murder of Clarence*. Stone wall flats at rear, with open archway at center, backed with a curtain. Immediately in front of arch centre-stage and set parallel to the backdrop, is a bed on a rostrum with steps, which are covered with a Plain stage-cloth.

クラレンスが舞台中央のベッドの上に寝ていて悪夢にうなされる様子と思われるが、そこへブラックンバリと二人の刺客が登場、令状を見せられたブラックンバリはそれを投げ捨てて退場する。二人の殺し屋は目を覚ましてベッドから降りたクラレンスをはさむ格好になるが、左手の殺し屋にすぎるようにしているクラレンスを右手の殺し屋が後ろから刺し、倒れかけるのを再び二度刺したところで床に倒れて死ぬ。殺し屋はただ黙って見ていたもう一人に襲いかかり、争いになるが彼はなだめるようにして退場する。残った殺し屋はクラレンスの顔に布をかけ、そのまま両手をつかみ、両手で引きずって退場する。

この1幕4場の殺しの場面は、はじめから良心の咎めを見せていた片方の殺し屋2がクラレンスの巧みな説得に心を動かされ、殺しに手を貸さなくなるのだが、せりふがないのでそこまでは伝わらない。ただ、このようなむごい殺しからすっかり手を引きたいという字幕のせりふは、良心をよびさまされた彼の気持である。迷いを見せるようすや殺し屋の心情は描かれていない。当然ながら、4場の前半のクラレンスの夢の語りは映像化されていない。

殺し屋の二人の心情の違いと殺し屋2が見せる良心については映像からはなかなか分からないし原作に描かれている殺し屋の人間性はこの映画ではほとんど感じとれないが、リチャードが何の感情も持たぬかのようにヘンリーの死体を運び出していたのに対して、殺し屋はハンカチのような布をクラレンスの顔にかぶせてから引きずり出そうとしている。

Scene 6(-a).

News of the death of Clarence brought to King Edward. [*Richard III*, II, 1.]

6a. *King Edward is told of Clarence's death: he himself dies.* Centre arch as in 5, but with backing (cloth or flat?) of stone arches in perspective instead of curtain. Flat with 'stone' arch angled against it on left. Throne on low rostrum with tapestry backing set at an angle on right.

まず大勢の廷臣たちやとりまきとともに舞台上の王座にいるエドワードに何か知らされ、エドワードは驚愕のあまり立ち上がりながら胸を押さえ苦しむ様子を、リチャードはすぐ近寄り後ろを支えられかろうじて立っているエドワードの脈を取ってみせる。この場面は映画用に作られた部分であり大変短いですが、挿入字幕の内容が効果的によく理解される部分である。エドワードは倒れて死に、大勢に抱え上げられて退場し、リチャードは十字を切ってみせる。リチャードの動きはここでもすばやく、知らせに驚くエドワードの隣のエリザベス王妃を責めるように指差している。リチャードの脈をとろうとする行為にエドワードはさっと手を引っ込めてもいる。映画の撮影のときに撮られたと見られる絵葉書 (Jackson, 106) ではしっかり脈をとるリチャードが確認できるが、映像は早く、よほど良く見ていないと気がつかない可能性もある。

[Unnumbered scene] (Scene 6-b).

Gloucester prevents coronation of the Prince of Wales. [*Richard III*, III, 1.]

6b. *Princes arrive.* As 6a.

この場面は Ball と Jackson でナンバーのつけ方が違うが、皇太子や王子たちが登場し、大勢のいる広間で、戴冠されようとする皇太子の頭上からさっと横取りするようにリチャードが王冠を取ってしまう。この場面は Ball のいうとおり 3 幕 1 場をなんとか映像にしようとしたものであるが、字幕はただリチャードが、戴冠を妨害とあるのみで、よく状況はわからない。また原作の 3 幕 1 場の後半の王子たち二人の利発そうな会話などはまったく描くことはできない。ただ、リチャードのあからさまな横取りが (王位をまもなく篡奪するであろうと予測させるようす) 映像になっている。

(Scene 6-b')

Lord Hastings visits Princes in the Tower.

[This is transitional, a visual adaptation of *Richard III*, III, 2, where Hastings is about to go to the Tower.]

(Jackson の説明なし)

上の Ball の説明のように 3 幕 2 場の最後のせりふから創造された場面だと思われるが、ロ

ンドン塔の一室と思われる低い寝台の上に膝に本を広げたエリザベスをはさむように囲んでいる王子たちが本を見ているところへヘイスティングスがやってくる。三人にそれぞれ別々に手を取ったり、手にキスをしたりの挨拶を交わして出て行く。この場面はおそらくヘイスティングスが誰よりも王子たちを愛し、皇太子の即位を誰より支援していることを示そうという場面で、それを阻むリチャードによる彼の斬首を際立たせようというのであろう。しかし説明が不足していてストーリーの展開が映像だけではよくつかめない。この部分について Jackson は、場面の説明もせず、まったく言及していない。果たして上演のときにこの部分があったのかどうかはかなり疑問に思える。さまざまな場面で省略が多くならざるを得ないサイレントの映画であるのにわざわざこの場面があると、原作を知らないものにとっては、王子たちに会いに行ったことによって、なぜヘイスティングスが次の場面で処刑されるのだろうかという疑問が残るのも当然である。

[Unnumbered scene] (Scene 6-c.)

Lord Hastings sent to execution. [*Richard III*, III, 4.]

“Come, lead me to the block; bear him my head;

They smile at me, who shortly shall be dead.” (*Richard III*, 3, 4, 106-7.)

6c. Hastings sent to execution. As 6a but with council table on right of screen.

ちょうど3幕4場の後半部分が映像になっている。原作では戴冠式の日取りを話し合うはずであるが、来るのが遅いリチャードを待っているとはじめはにこやかに話し合いを始めるが、すぐにバッキンガムと部屋を出て行く。まもなくリチャードが怒りながら入ってきて自分の「萎えしぼんだ左腕」を見せつけてそれがショアー婦人を中心とした忌まわしい魔術ののろいの結果であり、ヘイスティングスとその一味であるとして糾弾し、処刑を命じる場面である。リチャードははじめ画面に姿を見せようが一度左手に退き、すぐ入ってくる。リチャードは長剣を抜いて激しくヘイスティングスに向かって迫り、その間に舞台上には多くの衛兵たちと斧を持った首切り役人まで登場し、ヘイスティングスは机に突っ伏して絶望する。やはり映像だけでは、なぜリチャードが剣を突きつけて、処刑を命ずることになるのかについての理由はよくわからない。

この事態の急変に話し合いの席にいたスタンレー、イーリーらが顔色を変え、おびえるようにリチャードにつきしたがって退場していくが、リチャードは最後にテーブルの上から何かつまんで口に入れている。これは原作を知らないとなんともわからないし気づかないかもしれないが、3幕4場前半でリチャードが一旦席をはずすいわけのように、イーリー卿にとって持ってこさせるように頼むイチゴであることは間違いない。この場面ではリチャードたちの退場のあと、残されたヘイスティングスと役人たちが退場するが、Jacksonが掲載している映画のシーンの絵葉書 (Jackson, 115) と見比べると人物の退場の順番が異なっている。首切り

役人はわざわざ斧を持ってヘイスティングスのあとを着いていくように退場する映画とは違って、絵葉書の写真では、ヘイスティングスの前をこの役人が歩いている。従ってこの一連の絵葉書は、すべて動きのあるショットでありながら映画と同時に撮影されたものではなく、リハーサル中にとられたのではないだろうか。

この場面はちょうど挿入字幕のせりふをヘイスティングスが語るかのように終わっている。映像的にも首切り役人の斧が彼の後をついていくので処刑されることは明確である。

[Unnumbered scene] (Scene 7.)

Lord Mayor of London offers crown to Richard, which he reluctantly accepts. [III, 7]

“Then I salute you with this Royal title,

Long live King Richard, England’s worthy king.” (*Richard III*, 3, 7, 238-9.)

7. *Lord Mayor offers the crown. As 6c.*

3幕7場の映像化ではあるが、舞台上右手から市長たちとともに入ってきた数人とともに机の上に王冠がまず置かれる。そこへ正面アーケードからリチャードが祈禱書を持って牧師らとともに登場する。映像として面白いのはこの場面で初めてリチャードが無帽で登場することである。彼は常に白い房のついた帽子をかぶっており、何か激しい動きのときはわざわざ脱いでいる。この場面ではリチャードが、のどから手が出るほど欲する王冠を、いやいや受け取るふりを示さねばならないわけで、何度も首を振り拒んで見せるが、実はもう頭上に頂くために帽子を脱いでいるという皮肉な様子にも見えるのである。

バックinghamの音頭とりでどうにか「リチャード王万歳」の唱和にこぎつけて全員退場したあと一人残ったリチャードは、祈禱書をほうり投げて、満面の笑みで自分ひとり王冠を頭に載せ、それをまた高きさし上げて喜びを表している。

Scene 8.

Coronation of Richard and death of his Queen (Lady Anne).

[IV, 2, but in Shakespeare Anne is *reported* sick, and *reported* dead in IV, 3.]

8. *Richard, now king, discards Buckingham, and orders death of princes. As 6a/b.*

リチャードが戴冠式を終え王座についている様子から始まり、まずアンが倒れるが、直前の字幕からそれは死を意味している。Ballが上に書いているように、アンについては4幕2場でリチャードがケイツビーに「非常に重態である」という噂を流すように命じ、4幕3場で妻のアンがこの世におやすみなさいを言ったと述べているのを端的に映像化したわけである。この映画にはリチャードの求婚に応じたことを嘆くアンの気持は一切描く余裕はない。アンが運び出されるとリチャードはティレルに首を切る仕草をやって見せており、二人の王子の殺害を

命じていると思われる。ティレルが去っていく際、バッキンガムがやってきて約束のご褒美を要求する。リチャードはそっぽを向き、バッキンガムがリチャードの肩をつかみ要求するのもしリチャードははねつけて皆と退場してしまう。バッキンガムは一人残され、4幕2場の最後のせりふと思われる心から忠勤を励み、王にしてやったのにこの返礼がこれなのか、ヘイスティングスの前例に続かぬよう逃げようという感じで退場する。しかしながら原作を知らない人がこの部分の映像だけで、上記の情報を得ることができるかどうかはかなり疑問である。

Scene 9.

Murder of Princes in the Tower. [*Richard III*, IV, 3, but shown instead of described.]

“The most arch deed of piteous massacre

That ever yet this land was guilty of.” (*Richard III*, 4, 3, 1-2.)

9. *Murder of Princes*. As 5, but with bed upstage left of centre: oblong trap open immediately behind it, for murderer to descend.

Ballの指摘どおり4幕3場は、ティレルの語りであり、しかも二人の手下がやったことにしているが、画面はティレルが枕を押し当てて殺してしまったあとから始まる。ティレルは茫然自失の態で枕をはがしとり、自分の行為の結果を見るが、無邪気な両腕が抱き合ったままであるのをそっとはずし、一人をベッドの上に立ち抱き上げてから下の舞台上の奈落へと退場するが途中で2段降りたところで切れる。再びティレルが上がってきて今度は正視できないという様子で一度右手へベッドから背を向け離れて立ち、片腕で自分の顔の目の辺りを押さえるが、枕元に回って王子の額にキスをする。今度はベッドの手前から王子を抱き上げ奈落の階段を降りる様子が見えなくなるまで映されている。

この部分は舞台上では演じられなかったエピソードであり、ティレルの表情までは分からないが、4幕3場で語るティレルの王子たちへの同情心や憐れみの心や良心と後悔がうかがわれる映像になっている。ロンドン塔の中での殺害と死体を運び出す場面の3回目であり、遺体は今回最も丁重に運び出されており、リチャードの残虐さを思い起こさせもする。この場面は、原作においてもリチャードが観客をこれまでぐっと自分にひきつけていることができたが、これ以上はついていけないという限界に達する部分である。リチャードはこの映画では常に歯切れの良い悪党として一直線に玉座に向かってきたが、映像はその悪党ぶりの痛快さを伝え、観客を魅了してきた。しかしティレルの人殺しらしからぬ悲しみの映像は、リチャードに暗い影を落とすものである。

Scene 10.

Arrival of Richmond' in England. Nobles rally round his standard.

[Shakespeare does not show Richmond on the stage until *Richard III*, V, 2, well after

arrival, and Richmond's speech is still later in *Richard III*, V, 3.]

“O thou whose captain I account myself,

Look on my forces with a gracious eye.” (*Richard III*, 5, 3, 109-10.)

10. *Richmond in England*. Woodland backcloth. With ‘cottage’ wing set close against it on extreme right (onstage edge only is visible).

Ballの述べるとおりたしかに、5幕2場までリッチモンドの登場は原作では口頭の報告で次々伝えら得るものであるので、わかりやすくするために映像化して、ここに持ってくるのは当然であろう。原作ではリッチモンド上陸やそれに加わるイーリー卿、スタンレーの支持や Buckinghamの挙兵など続々来る知らせに追い詰められるリチャードが、追う側から追われる側になったことをあらわしているが、これまでのこの映画の組み立て方では、映像にするのはとても困難であり、映画ではリッチモンドとの対決に、焦点を絞ってある。

Scene 11.

Richard starts to meet Richmond, is cursed by his mother, Queen Margaret, and Queen Elizabeth. [*Richard III*, IV, 4.]

“Therefore take with thee my most heavy curse,

Which in the day of battle tire thee more

Than all the complete armour that thou wear'st.” (*Richard III*, 4, 4, 188-90.)

[Unnumbered scene.]

Buckingham captured and sent to execution.

[In Shakespeare, Buckingham is reported captured at the end of *Richard III*, IV, 4, and led to execution in *Richard III*, V, I.]

11. *Richard on his way to meet Richmond*. Street scene as 3, but without rostrum and steps on right. Cross now set upstage' right.

リッチモンドを迎え討とうと進軍するリチャードに母親マーガレット、エリザベスが「呪いをかける」といっても4幕4場における女性たちの激しい悲嘆の135行は映像にはされていない。ここまでの描き方では、やはり映画の組み立ての中にははいてこないものである。リチャードは払いのけるようにして母とマーガレットを退けるが、エリザベスとその連れている娘にだけは、取り入ろうとする。4幕4場にはエリザベスの娘は登場しないのだが、リチャードの求愛の対象が娘であることを分かりやすくするために、しばらくリチャードが二人に話をするような映像のあと、母に隠れるようにしている娘に直接リチャードが指輪をはめて、その手に口づける映像になっている。エリザベスの当惑した様子、娘が怖がって言いなりになる姿が映されている。しかしこれらの流れも原作を知らないほとんど理解されないと思われる。女

性たちの嘆きと悲しみはここまでずっと悪党でありながら、迫力と魅力を示してきたリチャードに比べてほとんど画面にはでてこないで、やや唐突な感じすら受ける。しかもエリザベスの娘への求愛はなぜなのかという点もわからないので、一層混乱をきたす可能性もある。

場面はずっと同じ設定で進行するので、Jackson は場面を分けてはいないが、一度画面が変わり、捕らわれたバッキンガムが連行されてくる。この部分は原作では報告のみである。リチャードは連行されてきたバッキンガムの両手をつないでいる鎖をいかにもなじるようにつかんでみせる。リチャードが処刑を命じ、ヘイスティングスのときと同様にやはり首切り役人のような役人があとを歩き、リチャードはそのあと勝ち誇ったように進軍していく。女性たちの嘆きが映像化されないのに対してバッキンガムの処刑を面と向かってリチャードが命じる場面はわざわざ作り出されたものである。この部分が舞台上演のときにあったかどうかはわからないが、リチャードの人物造型を必ずしも原作どおりにはおこなわず、映画ではあくまで悪党の精神を貫く主人公として描き出していくような気がする。

Scene 12.

Richard's dream, the night before the battle. [*Richard III*, V, 3.]

"O coward conscience how dost thou afflict me." (*Richard III*, 5, 3, 180.)

12. *Dream*. Landscape backcloth (river in distance) with tent opening set against it, upstage left. The ghosts appear on a rostrum in front of the tent, and Richard's bed and table are set upstage across centre.

リチャードが舞台左手に置かれたベッドの上に眠っており、リチャードの悪夢の中に訪れる亡霊たちの様子がベッドの足元の王冠の置いてある台の後ろの方に次々と現れる。亡霊が出現し続ける間、リチャードは微動だにしない。ヘンリー6世のエドワード王子が長剣を抜いて見せ、ヘンリー6世は短剣を胸に当て悲しげに首を振り、クラレンスも短剣をかざしてみせる。ヘイスティングスは自分の首を首切り役人の斧で切る真似をする。次に現れた二人の王子は眠るエドワードに向かって手を伸ばし指差すようにして呪いをかける。

アンは両手を組んで何か神に祈るようなしぐさで消え、バッキンガムが最後に、連行されたときと同じように両手首を鎖でつながれて出てくる。バッキンガムは王の旗印を取り去って消える。亡霊は次々にトリック撮影のように出現し消えるが、つなぎが未熟なのでごちない映像ではある。旗はバッキンガムが消えると、元の位置にあるという映像だ。亡霊が消えた直後リチャードは寝台の上で激しくもがき苦しみようやく起き上がり、旗印があるかどうか確かめている。リチャードは突然絶望したように両手で頭を抱え、胸を押さえ、短剣を抜き取り乱したように出て行こうとするのを止められてようやく我に返り退場している。

舞台上演でもリチャードの夢に現れる亡霊だけで5幕3場が表現されるのは普通であるが、亡霊が出たり消えたりするところを映像ならではの部分にしていると、いおうと思えばいえよ

う。しかしながらあまりにも未熟な画像処理は、技術が発達していないのではなく、トリック撮影のための画像処理の知識がないか、あえて必要ないと考えて普通に撮影しているのかのどちらかである。つまり同時代に特殊効果を狙った映像というのはすでに映画として流通し始めているので、亡霊が消えるというより役者が交代する間だけフィルムをまわすのを止めたというのがはっきりわかるあまりにも初歩的な映像である。

Scene 13.

Battle of Bosworth Field. Death of Richard. Richmond offered the crown.

[*Richard III*, V, 4 and 5.]

“God and your arms be praised, victorious friends;

The day is ours, the bloody dog is dead.” (*Richard III*, 5, 5, 1-2.)

“Now civil wounds are stopped, Peace lives again:

That she may long live here, God say ‘Amen’” (*Richard III*, 5, 5, 40-1.)

13. *Bosworth*. Forest backcloth, with matching cut cloth about two feet immediately in front of it. A forest wing is set about four feet in front of this on the left-hand side. (No wing is visible on the right.)

ここでは挿入字幕の内容の方が映像より多くを語っている。戦闘の始まりは狭い舞台で両軍がにらみあっており、何をやっているのか良く分からないまま、切り合いになる。すぐにリッチモンドとリチャードの切り合いになるが、舞台後方ではリチャードに倒された旗持ちが再び起き上がりリッチモンドの側の旗を振り続けている。リチャードはリッチモンドに右手を傷つけられてしまうが、よくは使えない左手に持ち返してもしばらく戦うが、やがてリッチモンドに倒されたところで唐突に映像は切れている。したがって字幕で説明されているリッチモンドへの王位交替はあまり示されないまま終わっている。字幕で語られる市民がこれ以上血を流すことはなく、平和が訪れたという点、つまりは原作の歴史劇としての意義深い王位をめぐる闘争とその犠牲を止め、政治的安定とともに平和が約束されるということは、描き出されないだろう。あまりにも情報が少なく、映像にはとても反映できていない。はっきりわかるのはリチャードの悪党ぶりとそれによって流される血がようやくとめられたということである。映画ではリチャードだけが前面にでてきて、歴史は背後に完全に押しやられているとっていいだろう。

2. 1911年『リチャード三世』の意義

このような映画の構成でまず明らかなのは、『リチャード三世』を未読のものにはほとんど理解ができないという点である。これについては手厳しい批評がされて、はっきりわかるのは、リチャードが悪党だということだけだとさえ述べられている。

その原因として Ball がまとめて述べているのは①カメラの定点撮影のみの映像であること。②グループわけがあくまで舞台上演にしたがっていること。したがってカメラがどちらのグループに付くこともなくカメラ・アイで人物たちを見分けることもできないこと。③役者たちの演技があまりにも誇張されたもので劇場の演技としてもふさわしいものに思えず愚かしく見えること。④フェイドアウトや溶暗や二重写しなどの映像的手法が使用されていないこと。亡霊の場面でも映画のテクニクといえるものは使用されていないこと。の4つをあげている。そしてさらに、この作品は映画とはよべず、せいぜいが舞台上演の記録としての価値しかないと述べている。この作品は映画ではなくドキュメンタリーであるとする研究者もいる。しかしながら、本稿はこの作品の映画としての価値を探ろうとするのではなくすでに述べたように、せりふという言葉によるコミュニケーションを映像のコミュニケーションに変えようとするその原始的段階から見出しうるコミュニケーションの実態である。

舞台上演の記録に過ぎないとしても、すでに述べたように映画のためにいくつかの場面は舞台の際よりもつけ加えられているのである。Jackson は、当時の映画評を見る限り、さほど注意を引いた映画ではないようだと言っている。ただ Benson の大げさではあるがリチャード三世の人物像のリアリティについては評価した記事があり、それは上演の評価とも似ているとしている。Crosse の上演記録も引用しているが、サー・ヘンリー・アービングの知的でコミカルな点を見せるリチャード像にしたがってなくてもよいのだが、Benson のリチャードには肉体的欠陥が示されていないとしている。演技方はシャープで力強く、乾いたユーモアも描かれていると好意的なものである。しかも Crosse の記録によれば、殺したヘンリーの血で汚れた短剣をヘンリーの衣服で拭き、その遺体をかかるところを持って肩にのせ、背負って退場するところも舞台上演の時からあったらしい。このような記録をみると、この映画は上演の記録で評判の高かったものを映画にしようという試みだったのかもしれない。

Jackson は、第一のポイントはアンへの求愛の場面であると述べている。この部分はすでに述べたように、上演の記録と映画がほぼ一致し、ただ上演の繰り返しは映画では避けられているわけである。さらに Jackson は Scene 3での子供たちにお金を撒いている場面、Scene 6-cでのイチゴをつまむ場面、Scene 13でのリッチモンドを応援するように振られる旗について、上演でも見られたのかどうか知りたいところではあるが、Crosse が観察眼にすぐれているにもかかわらず記録がないと述べている。しかしまた、エリザベスへの求婚のために催眠術をかけるようなしぐさと、映画の Scene 12の場面のリチャードが悪夢から覚めた途端にテントわきで眠る歩哨を殺す場面とが映画にないにもかかわらず上演の際にはあったことを Crosse は記録している。

このように上演の記録と比較しても必ずしも記録されていないだけかもしれないのではっきりはしないが、悪夢から覚めたりチャードが激しく短剣を振り回すような激しいしぐさのわけはこれでわかる。また、Crosse の記録によって Scene 13の右手を負傷して左手で戦い続ける

リチャードというアクションは上演からひきつがれたものであり、上演では Scene 7で王になることを正式に受諾したときに、片手にもっていた祈禱書を投げ出すばかりか、もう片方の手の数珠もなげだして、大声で“King”と叫んだことがわかる。このような細部の記録は記録する人の好みや個性でかなり内容が変わってくる可能性があるが、とにかく上演と映画では幾つかの部分で異なる演出が行われ、映画的手法としてはかなり稚拙でありながら、映像化のための努力がさまざまになされた可能性が伺える。

このように演劇史の資料的価値は大変高いものであると考えられるが、それだけではなく映像のコミュニケーションとして特徴といえるものはないだろうか。各場面をまとめてきたので個別には指摘できたと思われるが、もう一度考えてみよう。第一ポイントの Jackson が指摘するアンへの求愛の場面である。最も興味深いのは映画の映像が、おそらく制作者の意図とは無関係に見るものとコミュニケーションを成立させているという事実である。それは、アンの気持の変化が、画面上の左右の直線的動きであらわされる点である。舞台より映像になっている方が、せりふがないこともあるが、動きと気持が直接結びつき、結果的にわかりやすいものになっている。これは1912年の『リチャード三世』がはるかに三次元的な空間を映画の画面に作り出しているにもかかわらず、アンの気持の変化が一面的で浅い印象をうけると比べると明らかである。つまりサイレントの時代から映画は映像という独自のコミュニケーションを成立させているのであって、現在の観客にもそれは伝達される。これは映像のもつ興味深い力であり、1幕2場のせりふ中心の場面から視覚的要素を抽出したかのように、シェイクスピアの作品にあった要素へ意識をむけさせるだけでなく、カメラを定点においても舞台におけるアンの動きがひとりでの記号化されているということの意味する。この映画においてこのことが意義深いのは、映画を撮る側が意識してはいないだろうという点でもある。このような映像が確立していく映画の中の言語にも似たコミュニケーションのあり方は、他のこの映画化作品と比較することによってさらに明確になるはずで、本稿の今後の課題でもある。

3. 結論

この原作を読むことによってまず明らかなのは、『リチャード三世』の映画化によって必ず生じてくるリチャードという悪党の主人公のもつ演劇的自意識の強烈さである。ことばによってリチャードが観客と共犯関係を結んでいくとき、シェイクスピアはそれと同時にその共犯関係が切れるきっかけのリアリティの布石を敷いていく。したがってこの芝居は悪党の物語であると同時に、歴史劇としての歴史の一コマとしてのリチャードの位置づけは常に行われてもいくのである。劇の進行とともに、リチャードは悪党の魅力に観客をひきつけながら、シェイクスピアは彼の破滅も準備していく。それは単なる悪党退治ではなく、歴史がぎざまれていく過程で犠牲となった特に女性たちによる復讐も意味することになる。このようにして、『リチャード三世』に登場する女性たちはマーガレットを筆頭にして歴史劇をかたるコーラスを形成していくともいえるのである。

映画でこの作品を描くとき、リチャードの悪党ぶりを映像化するために、特にサイレントの場合は入念に描き出すために、悪党ぶりをカメラの前で演じていくことになる。カメラの前でリチャードが一人で演じて見せるとき、見るものは劇をみる観客と同様に、リチャードとの共犯関係を結び、楽しみ始めるわけである。しかしながら演劇と異なり、カメラはこの共犯関係をきるのが難しいのではないかと思われる。演劇的自意識と異なり、映画の中では、カメラと一体化するかのような主人公の演劇的自意識が、映画的な自意識を表象しはじめるのである。これはヘンリー6世を殺すリチャードから始まって、画面を支配的するかのように動きまわるリチャードによって強固に確立される。

このような〈映像的自意識〉は必ずしも人物において表象されるわけではないだろう。おそらく「映画を撮っている」という意識をことさらに示す映像があればそれは映画的自意識として認識されるであろう。リチャードがサイレントの映画においてさえ、この映画的自意識を示すのは、『リチャード三世』という演劇の持っている独自性から生じているものであるが、リチャードという人物の映像化についてきわめて示唆的でもある。おそらくこの観点から映像になった『リチャード三世』を考察すると、必ずこの〈映像的自意識〉によって映画が支配されるはずである。これも本稿の課題として次に考察すべき問題である。しかしながら1911年の資料的価値しかないとされている映画においてもリチャードはその映画的自意識を発揮し、演劇作品への理解を深めるだけでなく、リチャード像を作り出していると思われる。おそらくこの映画を見るものは、作品の内容についてほとんど知らず、ストーリーの展開を把握できないものであったとしても、主人公の強烈な自意識とその人物造型には目をみはるであろう。つまりこの映画は上映されることによって、リチャードという悪党を現在に蘇らせることは可能なのであり、おそらくそれは、演劇的自意識を写し取ったことによって生じる、映画独自のコミュニケーションによって、見るものの胸の中にリチャードが蘇るからであろう。

(注)

- (1) *Richard III*. Dir. Andre Calmettes and James Keane. Perf. Frederick Warde, Violet Stuart, Robert Gemp and Carey Lee. Dudley. 1912.
- (2) *Richard III*. Dir. J. Stuart Blackton and William V. Ranous. Perf. William V. Ranous, Florence Auer, Maurice Costello and Florence Turner. Vitagraph. 1908. 長さは10分。
Richard III. Dir. Frank R. Benson. Perf. Frank R. Benson, Constance Benson, Eric Maxon and Violet Farebtoher. Cooperative Cinematographer. 1911. 長さは23分。
- (3) Rothwell, Kenneth S., *A History of Shakespeare on Screen: A Century of Film and Television*. Cambridge, Cambridge UP, 1999, 299-300.
- (4) "Print of 1912 *Richard III* Uncovered." *Shakespeare Bulletin*. Fall, 1996: 35.
- (5) 本稿作成において参照した映画は下記のビデオに所収されているものである。
Silent Shakespeare. Prod. British Film Institute.
- (6) *Shakespeare on Silent Film: A Strange Eventful History*. New York: Theater Art Books, 1968.

(7) “Staging and Storytelling, Theatre and Film: ‘*Richard III*’ at Stratford, 1910,” *New Theatre Quarterly*. 16 (May 2000):107-22.